

結城史隆先生のご退職に寄せて

白鷗大学教育学部教授

伊崎純子

結城史隆先生は、この春白鷗大学でのご定年退職の日を迎えられました。在職期間は、白鷗大学経営学部ご着任の2003（平成15）年4月から本2021（令和3）年3月末まで、満18年間となります。白鷗大学に教育学部が設立された2007（平成19）年4月より教育学部心理学専攻に所属され、長年にわたり教育科学研究所所長として率先して実践研究を行うと同時に私共の研究を励ましてくださいました。まずは、研究者、教育者、実践者として、結城先生より賜りました本学への多大なご尽力ご貢献に感謝を申し上げます。

結城先生に関係する方々は領域問わず強い絆で結ばれ、公私にわたって深く、長く交流を続ける傾向が顕著です。この関係性は学際的な文化人類学にふさわしく、息長くユルクつながる関係性は羨ましくもあります。中でも地域活性化研究会（STONY）は、下野市、栃木市、小山市、野木町、結城市、古河市の自治体職員が自治体の垣根を越えて活動している稀有な団体です。STONYを結城市の飯島氏と結城先生が主宰しています。社会的課題の解消や地域活性化を目的として創られ、この団体は月に一度、自治体間の情報交換や参加者個人のスキルアップ（気づき・市民活動への参加のキッカケなど）をするために、勉強会と交流会を新陳代謝を繰り返しつつ続けてきたそうです（石川、2019）。結城先生のご退職直前の3月に開催された研究会は、結城史隆先生のご最終講義と称した「文化人類学の『見方』『知り方』『考え方』」を拝聴する機会となり、私も参加しました。

2020年度はコロナ禍が様々な行事に大変に重い足かせとなりました。大学人として過ごす最後の1年をまったく思うようには活動できなかった

結城先生に対し、大学は最終講義の時間も用意できませんでした。代わりに先生と交流の深いSTONYが荒海を漕いで企画してくださったことに感動を覚えます。恩師を慕うたくさんの教え子や行政関係者、教員有志、さらにはご家族が顔を揃え、年齢も様々に生後4か月から80歳を超える多彩な聴講生が、肅然と隣席を空けて大教室を埋め、先生の話術に引き込まれました。もちろん大人数が集まることに対して感染症の不安が全く払拭されたわけではありません。しかしながら体温チェックや消毒、マスク着用の徹底など最善を尽くして実施された企画は、すでに雀荘と飲み屋で学生時代に結城先生が実践されていた『人生は面白い、人類学は楽しい、だから命をかけても怖くない』（稲村、2008）という生き方が継承されているようでユニークでした。

最終講義を拝聴しながら思い出した結城先生との思い出を3つ、挙げます。

1つは、いつだったか、談笑の中で某テーマパークの冒険クルーズなんてお子様向けだと一笑に付されたことです。結城先生はネパール・フィリピン・タイ・マレーシアなどの真のジャングルをご存知です。先生はフィリピンでのご経験を前述した講義の中でも披露されました。また、当拙文掲載と同じ冊子に掲載されるであろう寄稿「文化人類学を生きる」にも詳細があるはず（ただし、締め切り4日前でまだ半分しか書けていないとのこと。果たして掲載されているのでしょうか）。例えば、3時間も乗り合いジープに乗り続け荒れ地を進んで森林地帯の村に一人で乗り込むなどと同じく私は自分のお尻がヒリヒリしてきます。言葉の通じない、ガイドもいない、そのような土地にたった一人で行き、見たこともないものを口にし、暮らすこと自体にスリルを通り越して恐怖すら感じます。ジェットコースターやジャングルクルーズを楽しめるのは「無事に短時間で帰ってこられる」安心感あつてのことです。ともすれば「邪魔者」扱いされかねない「よそ者」に、敢えてなる度胸がなければ文化人類学者は務まらないのではないかと私は思っていました。しかしながら、先生の講義をうかがっ

て、度胸の問題ではないと感じました。つまり、先生にとっては「ウチもソトも区別することに本質的な意味はない。そのちょっとした差異こそが興味関心の源」だということです。例えるならば、未知と遭遇した際に、未知なるものを異分子や自分のポジションを脅かすものとして捉えない「構え」が結城先生の中で完成しています。テーマパークのジャングルで十分な私はお子様だと結城先生の一言に感じていましたが、実は真に子供の心性を持っているのは結城先生の方ではないかと思ひ至りました。何にでも興味を持って手にしたものは口に入れ、友達になりたいと目を輝かせ話しかける乳幼児のような感覚を、結城先生は保持し続けているからです。

2つ目は、ネパールで結城先生ご夫妻が結婚式を挙行されたときの写真です。最終講義で「調査しつつ生活し、生活しつつ調査する」姿勢について語られている時に、「よそ者」が観察するだけでなく、「ウチの人」のように実践したことの1つとして思い出しました。ネパールには結城先生の教え子が多く在住され、結城先生のご結婚に際して、ネパールでも結婚式が挙行されました。写真の中の新郎新婦はともに幸せそうで、とても美しい写真でした。教え子の皆さんが飾った花が彩を添え、ネワール経の祭祀(僧侶)が祈りを捧げ、民族衣装に身を包んだ新郎新婦の額には赤いチャカがついていました。日本では見たことのない儀式的様子が写った写真を興味深く拝見しました。その写真は、プライベートな記念写真であると同時に文化を紹介するための記録写真でもありました。完全な「よそ者」でもなく「ウチの人」とも言い難いどちらにも足がかかったような柔軟な立ち位置は結城先生の文化人類学者としての生き方だったと思います。

3つ目は、「人を動かす力」について語られている時に、新入生オリエンテーションでの結城先生の講話を思い出しました。野球少年だったイチローが小学校卒業文集に書いた「夢」と題する作文を引き合いにして、結城先生はいつも情熱を込めてプレゼンテーションしておられました。イチローは小学生の段階から明確な将来のビジョンを持ち、現在地を言葉に

し、ビジョンを達成するために必要な行動目標を実践し、誰にも質量ともに負けない練習を行ったそうです。学生にとって、入試の緊張感から解放された気の緩みを引き締め、これからの豊かな4年間を想像してワクワクさせる効果がありました。常に結城先生は学生をエンパワメントする材料をたくさん用意してくださいました。結城ゼミ生を中心に活動を続けている、未来創造ネットワーク白鷗（通称「未来ネット」）は特に、結城先生の人づくり、関係構築が学内において目に見える形で現れたものです。結城先生のご指導のもと学年、学部を問わず、課題の発見・課題解決のための企画・実践・懇親会を繰り返し、学生は経験値を増やしました。同時に、学生たちのアイデアを地域にアピールする機会ともなり、学生たちがふき起こした新しい風は新規事業の創出や一体感・高揚感の復活を誘い、地域の活性化が生まれました。主催・参加・支援・発表・神輿・協働など多岐にわたる活動の数々について、未来創造ネットワークによる小冊子「未来物語2019－2019年度 活動報告」に詳細があります。学内外で先生に薫陶を受けた者は知識を貪欲に学び、地域との関わりに放り込まれ、机上の空論では決して終わらせずに頭と体をフルに活用して智慧に昇華させ、結城先生の後継者にふさわしい姿勢を身につけて社会と繋がっていくことがわかります。

このように振り返りますと、高い志と実現に向けた努力、地に足のついた地道な活動を結城先生から私は学びました。ご退職後の先生は「できればやりたいこと」として2点を最終講義で語られました。1つは「OMM (Oyama Makers Magazine)」民族学の発想で小山を考えることであり、もう1つは「LAA (Liberal Arts Academy)」一般教養の重要性の発信だそうです。その目標に至る道筋がどのような青写真となって結城先生の頭に存在するのか私には想像することもできません。想像できるのは、結城先生は本学の教職員でなくなっても、協・触・引（協力し、ふれあい、引き上げる）もしくは今日・食・飲（生き物として働くために飲み食いを共有し、また飲み食いのために働くことの繰り返し）を続けられるだろうと

ということだけです。先生はこれからも、わたしたちをtayo（相手を排除しない私たち）として懐に温かく迎え入れご指導、けん引してくださるものと思います。先生が大学を去られたのちも、これまでの会議や研究室に姿がなかった時と状況に大きな違いはありません。「生きている死者」としてどこかに先生が存在するリアリティを大学に遣る者は頭の中で恣意的に想像し、不在の中にある変わらぬ在を感じ続けることと思います。個々に認識される結城先生のまなざしと励ましは従来のようなファクトではないかもしれませんが、それぞれのリアリティとして感じながら自らの姿勢を正していきます。先生のますますのご健勝とご多幸をお祈りして、先生からいただいたたくさんの薫陶に心からの感謝を捧げます。

結城史隆先生、ありがとうございました。

石川智章（2019）. 近隣自治体職員が県や地域の境界を超えて学びあう | STONY | とちぎのしゅし (tochigi-seeds.com)、<https://tochigi-seeds.com/stony> (2021.3.14)
稲村哲也（2008）. 研究エッセイ⑦ なぜ文化人類学？ なぜ共生？、共生の文化研究（1）、38-51
未来創造ネットワーク白鷗（2021）. 未来物語2019-2019年度 活動報告、(非売品)

